

大枝流芳（岩田信安）小考

翠川文子

キーワード 香道・御家流・大枝流芳・岩田信安・大口含翠

要旨

大枝流芳の通行の略伝の内容の検証と諸資料による大枝流芳研究の手がかりを紹介する。大枝流芳の本名は岩田信安、本姓は大江、大枝流芳は版本の筆名。号は漱芳ほか、多く隠逸趣味を反映している。流芳は難波でも由緒ある家格の富家の出身。多病のため世事から離れ京都に享保年中まで隠棲し貝合から始まりさまざまな雅遊の故実について漢籍・古典を渉猟し筆録し考察を加えていた。大坂に本拠を移したのは享保十五、六年。香道への関心を強めたのはその頃か。享保十七年御家流の口伝を受けていた大口含翠に香道伝授を願って弟子入り。含翠の香道三流に通じた解釈と幅広い知見と多くの伝書の提供を受けた流芳は、含翠とともに伝統的な公家の雅びの世界としての香道御家流を新たに作り上げた。流芳の編著について『国書総目録』に加筆訂正を行った一覧を記す。流芳の没年については新資料と推定を紹介する。

はじめに

大枝流芳は、江戸時代の香道宗匠の中では、カリスマ的な米川常白を除き、その版本が流布したことによって最も著名な香道研究者であり、御家流・米川流などをもとに新しい御家流の伝授内容を組み立てた宗匠である。また彼は、香道だけでなく多方面にわたる著述・出版物を残している。その主たるものはもちろん香道関係の書である。しかし一色梨郷の『香道のあゆみ』^(注1)に取りあげられて以来、研究が進んでいるという状況ではない。一色梨郷は御家流皆伝者であり、職業柄香書を多数所蔵していた。『香道のあゆみ』は、これを活用しての著である。一色梨郷の旧蔵書は『国書総目録』でうかがうことができ、他に見られない大枝流芳関係の香書のあることがわかる。現在これは閲覧できる状況ではないので、将来公開されることになれば大枝流芳の業績確認は更に進むことになるだろう。

大枝流芳の香道以外の研究と著述（煎茶・華道・貝合・書道・植物・随筆）については、随筆『雅遊漫録』の解説と、煎茶関係から彼の著および事績に言及する論考があるが、他の分野の研究は見られないというのが現状である。^(注2)

現在、大枝流芳については、『国書人名辞典』^(注3)に簡略にまとめられた人物紹介と著作が一般に利用されるので、こればかりで、内容の検証と大枝流芳研究の手がかりを紹介するものである。なお彼の本姓は岩田信安であるが、現在大枝流芳として知られているので以下本稿でも大枝流芳を用いることとした。

『国書人名辞典』の記述は次の通りである。

大枝流芳おえだりゆうほう 香道家 「生没」生年未詳、寛延二年（一七四九）―同四年の間に没。「名号」本姓、大江。修姓、巖。号、流芳・四川・脩然翁・青湾・釣隠・漱芳。岩田信安と称す。「経歴」撰津の人。香道を大口保高に学び、皆伝血脈を継いだ。御家流を基盤に蜂谷流と米川流も参考とし、大枝流を創始した。また、煎茶・華道を能くし、高遊外・上田秋成^(注4)らとも交遊があった。

〔著作〕岩田流香譜 御家流香志 御家流香事目録注解
 〈享保一九〉 御家流白露結集 貝おほひの記 貝尽浦

の錦〈寛延二〉 介譜〈元文四〉 花月香次第 飾方秘
 鑰 雅遊漫録〈宝暦五〉 組香並諸会式 巖儀組香会式
 香包盤立物寸法 香道秋の光附香志〈享保一八刊〉 香
 道拾玉〈延享二〉 香道叢書 香道滝之糸〈享保一九刊〉
 香道千代の秋〈享保一八〉 香道軒の玉水〈元文二刊〉
 香道秘伝編〈享保一九〉 香道深緑 香之書 香木達味
 考〈元文二〉 古十組香秘考 十炷香之記〈元文四刊〉
 書体辨疑総論〈享保一八〉 心遠齋香道叢書〈享保一八〉
 心遠齋草花譜 青湾茶話〈宝暦六刊〉 雪月花集編〈享
 保一九〉 十組香外包和歌 名香合式次第 名香合手前
 記 ▽御家流香道百ヶ条 香道千代の光 抛入岸之波
 東山殿御香合

〔参考〕大阪人物誌正編 角川茶道事典

1 岩田信安・大枝流芳

大枝流芳の本名は岩田信安、本姓は大江である。「岩田」は、「崑田」とも、一字名で「岩」とも「巖」、「崑」とも記す。「巖」は「岩」の同義字、「崑」は「岩」の俗字である。姓名を縮めて「岩信」「巖信」「崑信」とも記す。「大江」は一字の「江」とも記されている。現在、香道者として知られる名前は、大枝流芳が一般的で、岩田信安はほとんど知られ

ていない。彼が世に出した版本は、華道の本を除き著者名は大枝流芳となっている。華道の書は、この書のための筆名を用いており岩田信安の名はない。版本が岩田信安に關係することを示しているのは、最初の版本『香道秋の光』の付録「香志」の扉にある「崑」という一字名だけである。なお『国書人名辞典』にいうように「岩田信安と称した」のではなく本名であることは、「売茶翁偈語」に、玄山と号した彼の弟を岩田氏といっていることから確かなことといえよう。^(注5)

一方彼の筆録を書写した多くの写本類には、岩田信安ほかの署名はあるが、大枝流芳の名はない。流芳という号もない。つまり「大枝流芳」という名は、享保十八年から始まる版本のためだけの筆名だったのである。この徹底した使い分けによって、彼に師事した人々や、写本類を書写した人々を除き、版本の著者である香道者として、大枝流芳の名が一般に定着し現在に至っているのである。彼の没後出版された香道以外の書も、その知名度の故であろう、大枝流芳の名で出版されている。

彼が筆録と版本とで名前を使いわけたのは、享保十七年にそれまでの香道の故実研究から、道の伝授を意識するようになったためではないかと推測している。つまり香道の宗匠としては岩田信安の名を用い、故実研究者として版本には大枝

流芳を用いたと考えるのである。ただし流芳の没後十年の頃（宝暦九年）に記された源光忠の『香道心の枝折』（東北大学狩野文庫蔵写本）の識語に続いて次のような記述がある。「崑田信安者撰州之住人。性者大江、号四川子とス。詩歌に達し大儒也。亦香ヲ能ス。後に大枝流芳と云。香之書数卷筆ス。かな本を梓あらわすヲ恥て大江ヲ大枝とする也」と。これによれば、大儒といわれる身で仮名書きの書を出版することを恥じて、本姓の大江を大枝に変えたというのである。先にあげた扉に「崑」の署名のある「香志」だけが漢文で書かれていることは、この説を裏付けるものかもしれない。ことの当否はさておき、「大枝流芳」は、版本に岩田信安を表に出したくないための筆名と信じられていたということである。

彼が香道の宗匠として晩年まで岩田信安を名乗っていたことは、『増補改定難波丸綱目』延享五（＝寛延元、一七四八）年版所収の当時難波在住の諸芸の師匠一覧に「香事指南」として「上本町一丁目 岩田信安」^(注6)とあることから明らかである。

しかし一、二年後の寛延版本^(注7)（年度は不明）は、「大枝流芳」に名を変えられている。香道の版本によって一般に知名度の広がっていた大枝流芳の名が採用されたのである。この版本は彼の没年のころ出版であるが、彼の思惑に反して香道者と

して大枝流芳の方が定着していったのである。

2 号・書齋名など

「漱芳・流芳」 香道の現存写本に見える彼の号は、漱芳がほとんどである。「芳」は薫香に関係していることから用いたものであり、「漱」は、大枝流芳の「流」と併せて見ると、枕石漱流（漱石枕流）^(注8)の川の流れて口を漱ぐという隠者の生活のイメージを踏まえてのものとわかる。漱流を「漱芳」と「流芳」とわけ、岩田信安の二つの立場を分けようとしたことを示している。

子 文 川 翠

「心遠齋」 彼が書齋に「心遠齋」（心遠亭）と名づけたことは、皆伝の弟子樋口淳叟道与が『飾方秘論』^(注9)を心遠齋で（書写を）許されたこと、また同人が『香木達味考』^(注10)を心遠高亭で（書写を）許されたこと^(注11)によって知られる。またこの語を号ともしたことは、『国書総目録』所収の彼の著に『心遠齋草花譜』^(注12)があること、『心遠齋香道叢書』三十四冊があつた^(注13)ことが記されていることからわかる。

この「心遠」は、陶淵明の「飲酒」二十首の五の「心遠地自偏」を踏まえているのであろう。『雅遊漫録』の都賀庭鐘（後述）の序（宝暦五年記）に、大枝流芳が大坂の町に住んで香事に奔走したことを「大隠は朝市に隠る」になぞらえて

いるのは、彼の「心遠」の号を頭に置いての文であらう。市中に住んでも心が世俗から遠く離れていれば片田舎にいるのと変わりはない、の意である。岩瀬文庫の『香之記序』識語の「以遠齋主人岩田漱芳」の「以」は「心」の誤記であらうか。

「青湾・涵青湾」^(注14)「四川」^(注14)「漚叟」^(注14) 前述の都賀庭鐘の序に、「網島の曲に居し、則ち水の美を美とし、居に扁して青湾と曰ひ、地景に依りて号を取りて四川といふ」（原漢文）とある。彼の大坂網島の住まいが、大川（淀川）の湾曲する所、水と緑の美しい場所として名づけられた「青湾」（後述）の傍らであることから住まいに「青湾」と名付け、四つの川の合流する所から「四川」と号したのである。「涵」は、満々と水をたたえる川の様子をいう。「涵青湾」といへるほとりに庵さして住る」（岩瀬文庫蔵名香合の記）とあるので当時既に「青湾」だけでなく「涵青湾」がそのあたりの美称となっていたらしい。青は東の方角を指す語であるから、青湾には淀川の湾曲部の東側の意も込めているのであろう。角川日本地名大辞典には「淀川が桜宮の杜下あたりで湾曲して湾となつた所を青湾といい、古来この水は茶湯用として著名であつた」という。桜宮は網島に続く北側の地である。「漚」は、大坂城の北側を流れる大川を堀になぞらえるもの。享保十五年筆記の『白露結書』（東北大学狩野文庫蔵）には、この河

畔にちなんで署名を「涵青湾（の）漁叟四川」と記している。青湾は彼の没後出版の煎茶の書にも『青湾茶話』（のち『煎茶仕用集』と改題）として使われた。

「提籠」^{（注15）} さげ籠。香道具また茶道具を入れた籠を携え野遊びを楽しむ人をさすのであろうか。「香志」の「香都総匣」条にいう「提匣」が想像される。

「靖共亭」 延享元年六月香書正編検査筆記をこの亭で終えたとの識語がある。^{（注16）} 靖共は、『詩経』に由来する語。

以下は版本に見えるものである。

「儵然・儵然子・儵然翁」 都賀庭鐘の『雅遊漫録』の序に、京の西山泉谷に（享保年中）隠棲していた彼が「儵然翁」と号していたという。また彼の最初の版本『香道秋の光』の凡例に、中国の書籍から香木・香の調度に関する記事を「儵然子が集」めたものを「香志」として付録につけるとある。そして「香志」の扉には「崑儵然先生編輯」（然は構えの部分に欠いている）と記している。本編と付録の著者が異なるように装っているが、先に記したように版本で唯一著者岩田信安を示唆する表記部分である。これは『莊子』の大宗師第六に「儵然而往、儵然而来而已矣」（生死を儵然として受け止めるだけ）などと用いられている言葉である。『大漢和辞典』（大修館）には、「物事に囚われないさま、融通自在のさま」とある。「儵」は「セウ、イウ・ユ、シユク、キウ」（同前書）

などの音があるが、凡例の「儵然子」には「しやうぜんし」と振り仮名が振られている。「儵」は一般に用いられる漢字でないためか、後世「脩」と誤記されている。管見では、享和二（一八〇二）年出版の『群書一覽』の『雅遊漫録』の解説に「此書の作者儵然翁」（振り仮名はシウゼンオウ）とあるのが誤記の最初であろうか。恐らくこれによって『雅遊漫録』活字翻刻は、「儵」を「脩」に改め、辞書類の大枝流芳^{（注17）}の説明もこれを踏襲し、さらに「修」とも記すようになった。

「江釣隠」 版本『香道千代の秋』『香道軒の玉水』巻頭の香炉・建の絵につけられたもの。江は、本姓の大江に住まいの側の大川（淀川）、また大河を意識したものであろう。柳宗元の「江雪」の「孤舟蓑笠翁 独釣寒江雪」の漁翁を隠者の自分になぞらえての号か。

「漁叟釣雪」「釣雪野叟」 版本『抛入岸之波』で著者名として用いているもの。釣隠と同様の発想による号。

「香熏堂」 版本『香道秋の光』の出版者としての名。香熏に關与することを示しつつ、香のノを去り、熏の草冠を去った用字である。始めての出版に、香熏に未だ熟せずの意をこめたものであろう。

以上によって、『国書人名辞典』の「名号」本姓、大江。修姓、巖。号、流芳・四川・儵然翁・青湾・釣隠・漱芳。岩田信安と称す。の部分は以下のようになる。

〔名号〕本名、岩田信安。本姓、大江。一字姓、岩・崑・巖・江。号、漱芳・四川・儵然・釣隱・釣雪ほか。大枝流芳は、版本の筆名。

3 出自・文雅の人

大枝流芳は、上田秋成が富家の出身といっていること（次項①）、大江という本姓を持っていることから、難波でも由緒ある家格の家の出身と推察されるだけで、それ以上のことはわからない。多病のため世事から離れ京都に享保年中まで隠棲していた（次項⑦）というから、家業あるいは家督を継いだ兄がいたであろうこと、求志斎主人・玄山と号した弟がいたこと、母は和歌山の出身であったこと（次項②）がわかる。さまざまな文雅の世界に関心を持っていた流芳であるが、注5の玄山の遺事から弟も文雅に遊ぶ人であったと思われる。

流芳の文雅の道への第一歩は、母の嫁入り道具であったらしい貝遊びに始まるようである。長じて遊びに適した貝を収集し、貝の資料を集め、ついには貝の図鑑と貝合の書として（注18）まとめ、寛延二（一七四九）年に序を記し、生涯の最後に『貝尺浦の錦』版本（寛延四年正月発行）として結実した。

彼の文雅への関心の向いたところについて、煎茶は『青湾

茶話』版本（没後出版）、華道は『抛入岸之波』（寛延三年出版）、その他のものは『雅遊漫録』（没後出版）に見ることができる。『雅遊漫録』には、文房器物・携帯器物・古裂錦繡・楽器楽譜・緒結・投壺など七種の雅遊が取りあげられており、説明だけでなく形状・模様の図も載せている。都賀庭鐘は、収録された器物について「扨びて質朴を取り、漸く自然に近し」と評している。

これらの書が最晩年、また没後まで出版されなかったのは、集中的に収集した香書関係と異なり、貝を初めとする個々の収集調査が早くから同時進行で少しずつ行われ、まとまった後も晩年に至るまで更に補足を想定し箱底に秘めていたためであろう。

先の『香道心の枝折』にいう「詩歌に達し大儒也。亦香ヲ能ス」という評は、文雅の人というときに、儒学・漢学に通じた人としての大枝流芳を認識しなければならないことを思い出させてくれる。当時の知識人階級にあっては、儒学にとどまらず中国から舶載される様々な分野の書を読み、教養として漢詩文を作り鑑賞し、余技として様々な文事を嗜むのが最高の文雅の人（文人）だったからである。文人としてくられる知識人の中で大枝流芳は、取りあげた文物の幅の広さから多くの分野の先駆的位置にいる人物と思われるので今後その方面の研究の成果を期待したい。

大枝流芳を「学を好み諸子百家の書全てに目を通していた」（次項⑬）文人としての観点から見れば、『香道秋の光』の付録の「香志」と『青湾茶話』が、余技の中でも本人が評価を期待したものであったかもしれない。「香志」は、香木・香器・香関連事項記事を集めたものだが、ほとんどが漢籍の抜粋で、「信按」と記す考察はわずかしかない。しかし彼が渉獵した書は四十五種に及んでいる。また『青湾茶話』は四十九種の漢籍から茶関連記事を抜粋し（うち二十四種は『説郛』の孫引であると正直に記している）これについての考察を加え、煎茶に対する考えも明らかにし、「煎茶の本」として価値ある書となっている。上田秋成が、大枝流芳は売茶「翁に謁して煎法をつたへし人也」（次項⑱）と記すのは、大枝流芳がのちの売茶翁に煎法を伝えたと読めるがいかであろうか。もしそうなら煎茶道史にとっては重要な記事である。

大枝流芳が、現実の生産活動から遊離し、趣味人として隠者風の生活を楽しんでいたことは『雅遊漫録』の都賀庭鐘の序文によって知られ、彼の名号にもそのことは反映している。「浪華隠士」と『改正香道秘伝』（享保十九年跋）・『抛入岸之波』（元文五年記か）に名乗っている。この隠逸趣味の中で没頭していた知識性の高い文雅の世界は、その後の御家流香道構築にも生かされているものである。

4 大枝流芳関連記述

前項に関連する管見記述を記す。大枝流芳の著述以外の事柄についてまとまった言及が見られるのは、都賀庭鐘（享保三年大坂生まれ）^{（注19）}が大枝流芳著の『雅遊漫録』に記した序（原漢文。左には【雅】と略記する）である。そのほか都賀庭鐘の医学の弟子かとされる上田秋成の『茶痕醉言』^{（注20）}（【茶】と略記）、大枝流芳の著『貝尺浦の錦』（【貝】と略記）ほかから香道以外の彼に関する記事を探すと次のようなものがあった。

- ① 富家の子で風流を好んだ畸人。【茶（自筆本）】
- ② 母は今の和歌山出身。その海岸で産するよい貝が幼時の遊具。その貝を捨てず、さらに貝を集めやがて『介（貝譜）』としてまとめた。【貝の跋】
- ③ 宝永・正徳（一七〇四年）のころ貝を探しに紀州和歌浦などを訪ねた。二十余年後再訪に変化を実感。この間、貝を求め兵庫県北部・大阪府・和歌山県北部を訪れ、また諸国の貝を集めた。【貝の上巻諸説】
- ④ 若いころ下河辺長流の「哥仙貝の集」を書写した。【貝の下巻十九丁】
- ⑤ 享保十（一七二五）年八月下旬、京泉谷の山中で朱仲の

『相貝経』を書写した。【貝の巻末付録】

⑥ 庭鐘（一七七八年誕生）少年の時、大枝流芳は京西山の泉谷で隠棲していた。【雅】

⑦ 多病のため世事から離れ水土の美を求め幽閑の地として京都を選んだ。【雅】

⑧ 泉谷では「茶は則ち山人のもの」といい楽しみ、病氣のことを尋ねられると自然の景物愛好をやめられないのが終身の癖といていた。【雅】

⑨ 数年後難波に帰り大坂城の北の網島に住んだ。【雅】

⑩ 享保十五（一七三〇）年二月、紐結びを大口先生に口授し、備忘のため筆録した【白露結書】

⑪ 享保十七（一七三二）年五月、上賀茂神社の競馬を見る。

翠川文子

⑫ 【国会図書館蔵古十組香秘考】
網島でも相変わらず風雅を楽しむ生活であったが、やがて心は隠者としつつ香技を以て豪貴の人々と交わるようになった。【雅】

⑬ 学を好み諸子百家の書全てに目を通していた。【雅】

⑭ 詩歌に達し大儒。【香道心の枝折】

⑮ 日本の好事家の秘めた伝をことごとく収集した。【雅】

⑯ 投壺の遊びを広めたいと思っていた。【投壺今格】^(注19)

⑰ 茶を聞き（鬪茶）茶器を選ぶことは売茶翁より勝れている。【茶（自筆本）】

⑱ 売茶「翁に謁して煎法をつたへし人也。元富家の出身、

点法香技に熟せしかば、器物の高賈を宗とせられたれども、席上の式、おのづから静にて風致あり。故に茶品をた、かはし、香煙をくゆらせて、隠逸の興は疎きと云」。【茶（異本）】^(注20)

⑲ 晩年、「網島に茶舗をひらきて、遊戯三昧」であった。

【茶（異本）】

⑳ 元文五（一七四〇）年、『抛入岸之波』に跋を記す。出版は十年後。【同書】

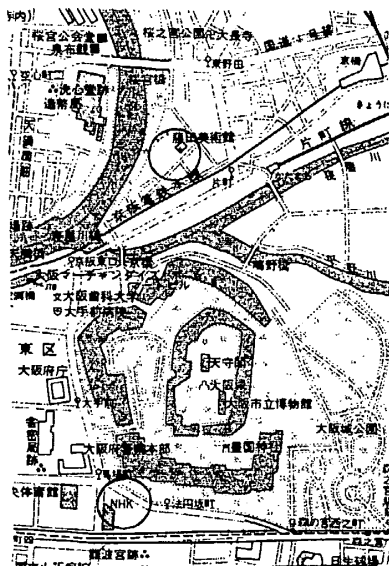
㉑ 寛延二（一七四九）年、『貝尽浦の錦』に序を記す。出版は二年後。【貝】

5 住まい

大枝流芳が摂津浪華の人であることは、都賀庭鐘が『雅遊漫録』序に「同郷人」とし、また「（京から）数年之後帰棲浪華」とあることから明らかである。彼は多病で療養をかねて浪華から京に移り住んだ（前項⑦）というが、その年代は推定できない。享保十（一七二五）年八月下旬以前に京の泉谷に移り住んでいたことが前項⑤によって知られる。京の泉谷は、現在右京区鳴滝泉谷町。町内の宝蔵寺は元禄十二年尾形乾山が窯を置いた所という（角川日本地名大辞典）。

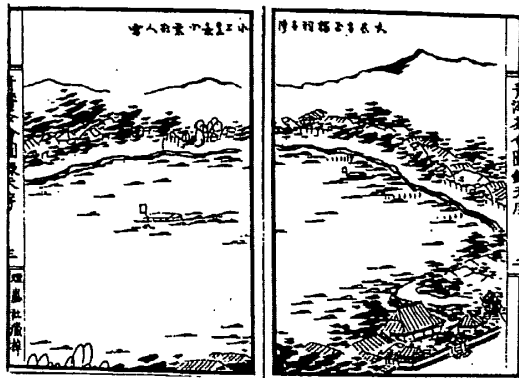
大坂での流芳の住まいとして現在わかるのは、『雅遊漫録』序にある「網島」(地図の上の○のあたり)と『増補改定難波丸綱目』^(注6)延享五年版にある香事指南者として住んでいた「上本町一丁目」(地図の下の○のあたり)である。「網島」は、大坂城の北側、現在都島区網島町。近松門左衛門の『心中天網島』の舞台となった大長寺跡に現在藤田美術館があり、流芳の庵はその付近と考えられる。享保二十年二月三日、この庵で行われた名香合の記(岩瀬文庫蔵)の中に庵の様子を記して、窓の外には呉竹があり、柳は春風にそよぎ、遠くの山が霞の中にほのかに見え、日の光を映す川面に行き交う舟や漁をする人々の姿が見渡されるといふ。庵は川に面して建てられていたのである。

「網島」については、『撰津名所図会』^(注21)卷之三に寛政年間の様子であるが、「この所は澱川の堤にして、漁家列なり鮮魚を多く市に出だす。また貨食家ありて、風流の第を設け、前には難波津の通船・釣船・網船の逍遙に夏の暑さを忘る。夕暮の河風に蚩飄揺として吹けども消えず、星の流るるに似たり。また中秋の月は、銀色三千界のけしきありて、流光に棹の音蕭条としてさらなり。東は志貴・生駒・掠が嶺峠・かづらき・二子山の雪げしき



流芳の大坂の住まい^(注22)

も一興にして、難波最上の名境なるべし」とある。文久二(一八六二)年四月、田能村直入は煎茶の会「青湾茶会」を催し、その顛末を『青湾茶会図録』に記している。その中の絵に「大長寺至桜祠青湾水上真景」があり、流芳の庵号でもある「青湾」が現在の淀川東岸の桜宮公園のあたり一帯を指していると知れる。^(注23)ただし手前の大長寺が流れのすぐ脇に描かれているところから見て、川の流量の変化・流土堆積や護岸などで川幅は変化しているらしい。直入は青湾の水を飲み比べ、大長寺の北および桜祠の南あたりの水が琵琶湖の水に匹敵するとし、この日の第一席を大長寺としている。



青湾風景
「大長寺至桜祠青湾水上真景」^(注24)

流芳が住まいをこの地に定めたのは、難波最上の名境であることと、茶によい水を汲める所ということであったにちがいない。なお『大坂人物誌』^(注17)に、流芳は「享保中桜の宮に住すと云ふ」とあるが、これは青湾が桜の宮の堤の下の流れというイメージから記したものではないか。

その後住んだ「上本町一丁目」(地図下の○のあたり)は、大坂城のすぐ東南側の町。現在も上本町一丁目はあるが、これは昔の同町三丁目の一部にあたり、昔の上本町一・二丁目は明治四年周囲の武家屋敷地とともに大坂城地として収公され、兵部省の管理下に入ったという(『角川日本地名大辞典』)。現在は番場町。最もお城に近い町屋群に流芳の家があったというので実家の富家ということも高い家格であったこともうなづかれよう。

享保十五(一七三〇)年二月、流芳は大口含翠に口授した緒結を備忘の為に筆記し(『白露結書』のち『御家流白露結集』と改題したと思われる)、名号の項で記したように「涵青湾(の) 滄叟四川」と号を記しているから、この時流芳がすでに網島にいたことがわかる。また同年十一月に流芳は大口含翠所持の『参雨齋香之記』を書写している。^(注25) これらにより流芳は、京・大坂を往来しつつも大坂を活動拠点に変えていたとしてよいのではないか。この前年、都賀庭鐘は十二歳。親戚知人に託したとして子どもを京に行かせる年齢として考

えられない年齢ではない。庭鐘が流芳に会ったのはその頃とし、流芳の大坂帰還を注19の享保十八年説より早め、享保十五年、遅くても十六年としたい。これは後述の大口含翠に師事したのが享保十七年一月であることも大きな根拠となる。なお『香道秋の光』(享保十七年記)に京の香道具細工所を挙げていることが京都在住を示すとされるが、大坂に数寄道具師はいるもの(『難波丸綱目』)、伝統と技術では他の追随を許さなかった京都の店を紹介したと考えるべきであろう。

その一方、流芳が網島に本拠を移してから、京都をしばしば訪れていたことは、後述の『香道随意』に、「享保十九年夏洛にて聞、洛にて見し」香についての記述があること、新組香の盤立物を京の細工師に依頼していたであろうこと、香道書の版元が京都にあったことなどから想定できる。

6 大口含翠への入門と稽古目録百箇条

大枝流芳が、香道の師の大口含翠^(注26)といつ出会ったかはわからない。現存の資料によって、前述のように流芳が緒結びを含翠に伝授し、流芳が含翠所持の香書を書写していることから、享保十五年には二人の交流が始まっていたことが知られる。二人の交流は「日本の好事家の秘めた伝をことごとく収

集した。【雅】（前々項^⑮）という流芳の様々な雅遊の故実を収集する活動のうちに始まったのであろう。含翠は石州流の茶道で名を知られている人であるが、香道にも造詣が深く、流芳の『香道随意』^{〔注27〕}の巻頭の小引に次のように記されている。

余多年香をこのミ先に志野流の香道を聞候といへども委しからず。其後師を求るにてあり。享保十七壬子歳（一七三二）正月九日偶大口先生に謁して香道を聞、それより日を追、年を積て習学す。先生ハ白川殿之臣猿島帯刀先生の門弟也。猿島氏之香道ハ西三条殿末流なり。別に香道伝来の系図・連理香之巻を付して伝ふ。また大口恕軒（含翠）先生の家、志野三世省（巴）・隆勝・宗拾・光悦・光甫・大沢常栄・同子常知・大口先生と相承せり。其余米川流之事を採申、古書を集て、口伝を猿島氏に請る。＊（ ）は筆者加筆。

この書によつて流芳の含翠への師事が享保十七年一月九日であったと知られる。二人は以前から雅友または文事の先輩後輩として情報交換を行っているが、この日の訪問以降伝授の世界の師として香道の奥義を受けることになったということであろう。この小引は含翠から直接伝授を受けた者の筆記であるから、含翠の資料として最も価値のあるものといえる。含翠が坂内宗拾につながる志野の古来の伝授を受けていたこと、宗拾の流れでその技量によつて新たな聞香の世界を展開

した米川常白^{〔注28〕}の流れの研究もしていたこと、香道の古書を収集していたこと、室町公家の雅遊の香から出た御家流の口伝を受けたことなど、当時の香道諸流と伝書に精通していた第一人者であったことが明らかにされているのである。

流芳は、これより先に（遅くても『参雨齋香之記』書写の享保十五年）香道への関心を高め関係の資料を書写しまとめ始めている。『香道拾玉』（版本と写本十八書から香道関係の記事を抜粋し考察を加えたもの）に「余多年香を好により古来の諸書の中に香の事にあづかるもの散在せるを集て一卷となし事を考るの一助とす」と記しているところにそのことがうかがえる。この年五月（入門から四ヶ月余後）なった『香道秋の光』（序に「集をき侍りける巻々」とある）や付録の「香志」（前述）も何年かの資料収集の成果であらう。このように香道についての造詣を深めていた流芳が改めて含翠に弟子としての礼をとったのは、当時広まっていなかった御家流の口伝を受けるためだったと思われる。すでに志野流の香道の理解に満足していなかった流芳は、三条西実隆につながる香道ということで地下とは異なる雅びの精神を期待したのではないか。この入門によつて、含翠の受けた第一級の伝授系統が流芳に伝えられたのである。そして茶道で大口流という独自の世界を広めていた含翠は、茶道にとつて周縁の香道世界でも新しい世界の構築を流芳の後援者として実現したとい

える。含翠の三流に通じた香道の解釈と幅広い知見と多くの伝書の提供を受けた流芳は、含翠のもとに集まった同好の士の中心人物として、^(注29) 伝統的な公家の雅びの世界としての香道御家流を作り上げたのである。含翠が猿島氏から受けた口伝がいかなるものか明らかでないが、おそらく十分な内容のものではなかったであろう。諸書に見える含翠の言葉から猿島氏またはそれ以前の伝に言及するものが見られないことからの推測である。

流芳が御家流構築に最初に取り組んだのは、稽古目録作成である。『香道廿七箇条注』（延享年間宮崎詮恭記）には、「先生、先師大口含翠先生卜相儀テ如此稽古ノ目録ヲ立」とある。享保十七年至日（夏至または冬至）跋のある『香道千代の秋』（出版は四年後）には、「三十二箇条目録」を載せ、この時すでに「八十八ヶ条の名目を立て…其中初三十二ヶ条、中三十二ヶ条、後二十四ヶ条と三つにわけ伝」と記している。茶道などの箇条目録、たとえば片桐石州の「茶湯三百箇条」などに倣って、香道にも取り入れようとしたものである。この最初の八十八箇条はやがて順序を修正し、さらに十二箇条を追加し百箇条とし、初二十七箇条（組香閑連）・中二十五

条（香事故実）・後四十八箇条に区切った。この区切りのもつとも早い伝書は享保十九年三月、樋口淳叟が流芳の伝授を記したものである。^(注30) 百箇条とその注解はこの樋口淳叟系のも

^(注31) のほか、宮崎詮恭が淳叟より後の伝授を記したものの、^(注32) 孤芳山人が流芳の没後自らの聞書に同門その他の伝授内容を加えた『儉閑記聞』（後述）、の三種がある。流芳の御家流香道について知る中心的な書であり、含翠が監修に力を貸した書としての認識の上に今後の研究が必要である。^(注34)

7 著述

流芳は、含翠への入門後まもなく前述のように書きためた一部を「大口含翠先生門人大枝流芳」の名で、香薫堂蔵版『香道秋の光』を出版した。この反響の結果残った原稿および追加原稿は版元植村によって『香道千代の秋』『香道滝の糸』として出版された。ついで百箇条制定にも反映させた『香道秘伝書』に校注を付し『改正香道秘伝』として享保十九年一月完成させている。またこれと前後して百箇条制定、『香道秋の光』以下著述の参考とした諸書に注解を付している。これは含翠から伝授された書と自身が得た古書で、正編・続編・後編二十部の叢書とし、同志と講究し注解を筆記したものである。^(注35) 神保博行「香道の伝書」によれば、最初の叢書は、大部分を師の大口含翠翁から書写し、一部を三教堂蔵本、あるいは他の古写本からとっており、流芳の書写・校考・訂正は享保・元文の間で、これを宮崎詮恭が寛保・延享

26	▲香道深緑	3冊	*	明和書籍目録等によるとい うが出版予告のみであ らう。組香集。目録 は『香道軒の玉水』に ある
25	○香道百箇条目録	1冊	写	箇条目録のみ。岩瀬文庫『香合叢書』所収
24	香道軒の玉水	2巻	版	元文元年記、二年刊
23	○香道廿七箇条注	1冊	写	延享三年宮崎詮恭に口授の筆記
22	○香道伝	1冊	写	香書正編の校注解題
21	香道千代の秋	3巻	版写	享保十七年跋、元文元年刊
20	香道滝之糸	2巻	版写	享保十八年記、十九年刊
19	○香道随筆	1冊	写	他書により著者判明。岩瀬文庫『香合叢書』所収
18	○香道随意	1冊	写	元文二年九月記。岩瀬文庫『香合叢書』所収
17	香道拾玉	1冊	写	諸書より香事関係を抜粋したもの。延享二年写本あり
16	○香道具寸法集 付録香志	1冊	写	11より項目は少ないが説明は詳しい
15	香道秋の光	3巻	版	国書「御家流香志」はこの書と同本
14	○香伝制規	3丁	写	享保十七年記、十八年刊
13	香包盤立物寸法	1冊	写	明和九年写本のみ。国会図「名香之記」のうち
12	○香事千代の古道	1冊か	写	香包紙寸法・組香盤立物寸法
11	○香器物寸法書尚象録	1冊	写	元文二年樋口淳叟写。注1の「香道の伝書」に紹介。個人蔵未見
10	巖儀組香会式	1冊	写	瀨文庫『香合叢書』所収
9	○薫香名目志	1冊	写	延宝元年序。著者名はないが15と共通部分が多い。16の完成本か。岩瀬文庫『香合叢書』所収
8	組香廿三節並諸会式	1冊	写	樋口淳叟に口授の筆記
				「諸家名香集」とも。いろは順香名録。元文三年十二月跋
				著者名はないが一連の流芳の書中にある

8	抛入岸之波	2卷	版写	華道の書。「本朝瓶花史」とも。元文五年跋、寛延三年刊
	付録闘茶	1卷	版写	
7	青湾茶話	2卷	版写	煎茶の書。「煎茶仕用集」とも。宝暦六年刊ほか

『国書人名辞典』の「著作」の削除は以下の通りである。

①同一書異名表記で重複のため削除し本題に移動したものの。

「御家流香志」(↓香道秋の光)

「介譜」(↓貝尽浦の錦)

「貝おほひの記」(同前)

「古十組伝」(↓古十組秘考)

「雪月花集」(↓改正香道秘伝)

②「香道叢書」(早大蔵)は削除する。内容は流芳の香道版

本(4・15・21)と他流の版本。

③「香之書」(米沢図蔵)は削除する。内容は15・20・21の

抜粹と他流の書。

8 没年

大枝流芳の生没年は未詳であるが、その没年については、自宅で吉井保真に花月香伝授を行った寛延二(一七四九)年三月二十三日から、『偷閑記聞』に逝去のことが記されている宝暦改元(一七五二)年冬の間であると『香道のあゆみ』

(注)
注に推定されている。

この没年推定の幅は、東博蔵樋口淳叟道与編『香事焚組香式』によりさらに縮められる。この書の末尾には焚組の記録例が次のように並べられている。

①寛延巳(一七四九)初冬三日、三条西実隆の正忌日に

より樋口淳叟の北斗菴で供香を行い余香で焚組香を行う。連中九人、香十一種。正客信安(大枝流芳)は

「手向山」と「軒の橋」を出す。

②晩秋中旬、有馬湯で焚組香。連中四人、香九種。信安は「秋霧」「折焼柴」。樋口淳叟は不参。

③九月十六日、焚組香、連中の名なし、香十二種。樋口淳叟不参らしい。

④皐月二十四日、流芳病氣療養のため有馬湯滞在中、看病に訪れた樋口淳叟が病床の師の前で焚組香、連中四人、香九種。

⑤戊(一七五四年)臘月十有八日、於元明亭(関東か)、連中五人、香十種。

⑥乙亥(一七五五年)二月八日、於宇都宮大明神、連中

十四人、香十五種。

年次の明らかな①によって、大枝流芳の没年月は、寛延巳二年十月三日以降となり、一色梨郷の幅を半年あまり縮められる。またこの①⑥が年月日順であるなら、②③が翌寛延三年九月、④が翌々年寛延四年（十月二十七日に宝暦と改元）五月の会となり、流芳の亡くなったのは、寛延四年五月二十四日からその年の冬までの間となる。

先の『偷閑記聞』は、沙原居士の跋文によれば、大枝流芳の晩年の弟子^(注33)であった孤芳山人の依頼により、山人が書き出した流芳からの稽古百箇条の聞書を点検・修正しこれに跋文を記したのが宝暦元年冬であった。これに先立って孤芳山人は、同門の高弟を訪ね大枝流芳の遺教を聞くなどし、聞書の整理をしたと跋にあるので、この書は流芳が亡くなってすぐに成ったと考えられない。それゆゑ流芳の死が寛延四年なら、病床での香会から間もなくのことであったであろう。

また樋口淳叟は、寛延三（一七四九）年十月、大枝流芳の『香木達味考』を宗栄（岩田五良兵衛）の重ねての願いにより^(注37)伝えている。この書は香道の蘊奥に達した者が伝授される書である。この書を除き、現存する樋口淳叟の弟子への伝授の書は、いずれも浪華を去り江戸に行つてからのものであることからみて、淳叟自身の弟子への伝授ではなく、大枝流芳が既に亡くなつていたための依頼による伝授とも考えられ

る。もしそうなら病床での香会は、寛延三年五月二十四日、そしてその後まもなく亡くなったということになる。あるいは②以来④まで有馬湯滞在が続いて伝授のことが行われなかつたため、師の不在の間の大坂で頼られた皆伝者の淳叟が伝書を渡したと考えれば、寛延四年の死と矛盾はない。

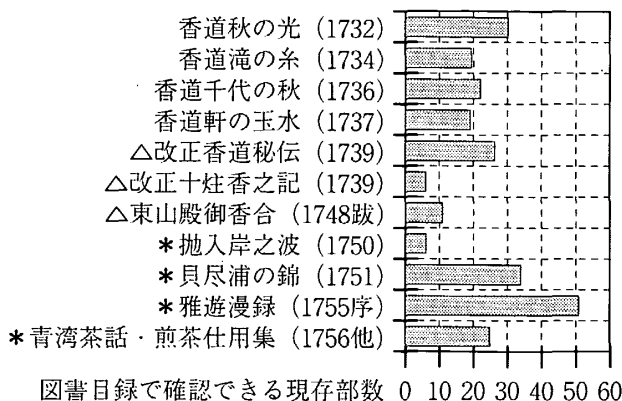
おわりに

大枝流芳の生涯は大きく二分される。その転換点が享保十七年一月の大口含翠に弟子の礼をとつた時である。前半の大坂での幼少期から京都泉谷での隠逸生活では、中古の公家の雅遊に関心を持ち、また茶の湯・立花に対する超俗的な趣味としての煎茶や抛入花、楽器に親しんだ。世俗を離れた読書文筆の生活の友である文房具、身近の道具器具類へも関心の目を向けていた。雅遊は、貝合と投壺を中心に韻筆・文字鎖・鬪草・鬪茶と関心を拡げている。そしてそれらについて収集した資料（主に漢籍）に考察を加え筆録して座右の箱に溜めていった。この時にまとめられ、また継続して筆録されたものは、流芳の晩年・没後にグラフ（*の書）で示すように出版され現存している。

この時期の最後に最も関心を寄せていたのが香道で、資料収集・考究の間に大口含翠に出会い後半生の御家流香道構築

大枝流芳編著の版本

(出版年ほか) △校・注の書 *香書以外



が始まったのである。この構築は、香道三流に通じた含翠の知識見識と流芳の雅遊における知的考究の積み重ねとによってなされたのであるが、さらに影響を与えた伝書・人についての研究も今後の課題であろう。たとえば人については含翠^(注38)について影響を受けた京の野本青山^(注38)がいる。彼のことはその飾りについての問書『飾方秘鑰』(『飾方伝』)や『香道随筆』の言説によって流芳との関わりを見ることができよう。

最後に流芳が後半生を中心に香道を据えた理由に触れたい。理由の一つは、貝合・鬮茶を特に好んだ流芳がその延長線上にある香合・十種香に親しんだのは自然の成り行きだっ

たということ。一つは、組香に様々の故実や多くの雅遊を反映させることができたことであろう。なかでも盤上に様々なミニチュアの細工物を並べ動かすことは、雅遊の机上経験でもあり、流芳の前半生の蘊蓄を形として披露できる楽しい場であったと考えてよい。版本に見える流芳の新作組香三十五組のうち二十二組が盤を使ったものである。『香道秋の光』に京都の細工師の紹介があるのも、富家の間にこの趣向を広めていたことを示している。含翠に「根合香」という中古の雅遊による新組香がある(『香道秋の光』)ことや名所香の立物に「大口氏好」がある(『香包盤立物寸法』)ことは、この好みが師弟共通のものだったとわかる。初心者のためのものという組香ではなく、雅遊・故実擬似体験のための組香という面も流芳の研究には必要なことであろう。

(助教授 香道研究)

付記

江戸時代の写本・版本の引用には、漢字は常用字体・正字体を原則とし、句読点と濁点「」「」を補った。また万葉仮名・草仮名は通行の仮名に改めた。

注

(1) 一色梨郷『香道のあゆみ』芦書房、一九六八年六月発行。二八二頁〜二八八頁ほか。没年推定は二八二頁。この中で紹介され

ている大枝流芳の著述や記事は他で確認できないものもあり、貴重な資料である。一色梨郷は、大名家などの古書画・道具を扱う仕事をしていたという。旧一色本の内容については、神保博行「香道の伝書」「伝統と現代」第十巻「茶と香」学芸書林、一九六九年七月発行にその一部が紹介されており、大枝流芳調査には見逃せないものである。

(2) 奥田昌子「大枝流芳と青湾茶話―上田秋成著「清風瑣言」の再検討―」「芸能史研究」第二五号、一九六六年一〇月発行、三五頁。小川後楽「―風流の好事家―大枝流芳」「日本美術工芸」五〇九号、一九八一年二月発行、四四頁。

(3) 岩波書店、一九九三年十一月発行。

(4) 上田秋成の師の都賀庭鐘の誤り。『角川茶道事典』誤記の引用による誤り。流芳の没年が寛延四年（一七五二）なら秋成は当時十八歳。

(5) 『売茶翁集成』生誕三百年記念出版、主婦の友社、一九七五年一月出版、一四八・九頁による。売茶翁が「坂陽求志斎主人、姓岩田氏、号玄山」の亡くなったことを、その兄の漱芳（信安の号）から聞き、玄山の遺した和歌に対して詩句を霊前に手向けたいささつと作品が記されている。このことは注2の小川後楽の論考に既に紹介されている。

(6) 下之二の五九丁表。野間光辰編『校本難波丸綱目』中尾松泉堂書店、一九七七年一〇月発行、一五六頁。ここには他に樋口道与・永井文安の名が記されている。樋口道与は大枝流芳の皆伝の弟子淳叟。永井文安がもし永井洵美と同一人であれば同じく流芳の皆伝の弟子。皆伝のことは、注9参照。

(7) 同前校本六〇〇頁。

(8) 『蒙求』の「孫楚漱石」で孫楚が言い間違えたものとの文句。

『世説新語』排調が原拠か。

(9) 彼が皆伝であることは、鹿児島大学玉里文庫蔵『御家流香事稽古目録百箇条注解』香事伝来宗匠之事（箇条八十五）にある。東北大学狩野文庫『香道濫觴書』等には、大枝流芳が師より伝受したものは樋口淳叟に伝わったとする。注6の『校本難波丸綱目』には「松平主殿頭扶持人 ヒノ上町 樋口道与」とある。ヒは樋。松平主殿頭は島原松平家。樋口淳叟は、師の没後まもなく浪華を離れたらしい。離坂は御家流後継について問題があったのであろうか。やがて宝暦八（一七五八）年四月江戸で津軽侯に医師として召しかかえられる（『江戸御家中明細帳』『津軽医事文化資料集成』一七一頁。寛政七年病没）が、その折には香道と縁を切ったことだったという。『香道心の枝折』に「津軽家に仕官シテ香道の門人をまねかず」とある。その後縁あつて松田保吉が門人となり、現在の御家流につながる道筋ができた。

(10) 国会図書館蔵同書（八三二―二四一）識語。

(11) 元文五年。都立中央図書館加賀文庫蔵同書（加賀六四〇九）識語。

(12) 写本。個人所蔵。未見。

(13) 白井光太郎『増補改訂 日本博物学年表』大岡山書店、一九三四年九月出版、一二〇頁、享保十八年条に「大枝流芳（岩田信安）『心遠齋叢書』三十四冊を著す」という。初版・増訂版にはこの条はない。依拠不明。

(14) 『青湾茶話』版本の都賀庭鐘の序に著者を「巖四川子」と紹介し、書中の包育の絵の中に「岩四川」の名をさりげなく記すなど、この号は写本・版本ともに見える。現在の川筋は淀川・寝屋川・平野川の三本であるが、旧大和川の川筋が完全に新田化

- する以前の元文年間の『大坂図鑑綱目大成』ほかには四本あるいはそれ以上の川筋が見える。
- (15) この号は、樋口淳叟が享保十九年筆記した注9の『御家流香事稽古目録百箇条注解』に「崑田漱芳大江信安提籠翁四川」として出ている。
- (16) 都立中央図書館加賀文庫『偷閑記聞』に江田世恭書写書込。
- (17) 石田誠太郎『大坂人物誌』巻二、石田文庫、一九二六年一月出版、六十一頁は「修」の字を用いている。
- (18) 白井光太郎『増補改訂 日本博物学年表』大岡山書店、一九三四年九月出版、一二八頁には、「元文四年七月下浣、岩田信安『介譜』稿成る」とある。依拠不明。序より十年前になる。序には「『介譜』と号して筒に納め置きぬ」とあるので序より相当以前に稿ができていたとも読みとれる。
- (19) 中村幸彦『都賀庭鐘攷』『近世作家研究』三一書房、一九六一年五月出版、一五三頁。上田秋成が都賀庭鐘の門人であることは一六一頁に言及。投壺は一五九頁。『改正香道秘伝』跋の日付「四月」は「正月」の誤植か。
- (20) 自筆本は、『上田秋成全集』第九卷、中央公論社、一九九二年一〇月刊三二九頁。異本は同書三六五頁。
- (21) 森修編『日本名所風俗図会10』角川書店、一九八九年六月刊所収による。一〇三頁。
- (22) 青湾は桜宮の堤の下にあった小さな湾をいうとの説もある(守屋雅史「青湾碑と青湾茶会」『大坂の歴史と文化財』第六号、二〇〇〇年八月発行一四頁に紹介)が、田能村直人の描いた広い湾曲部のイメージを考えたい。
- (23) 『新日本ガイド 大坂神戸』日本交通公社出版事業部、一九七九年四月発行、四七頁所載の一部転載。
- (24) 国会図書館蔵田能村直入『青湾茶会図録』所載の青湾図。右手前が大長寺、現在藤田美術館のあるところ。画中に煎茶席の旗が十箇所見える。この日十一箇所本席七席があった。
- (25) 神保博行「香道の伝書」『伝統と現代』第十卷「茶と香」学芸書林、一九六九年七月発行、二〇一頁。
- (26) 「元禄二年(一六八九)生、明和元年(一七六四)没。名、保為・保喬(保高)。号、樵翁、恕軒・含翠。大坂の人、大西閑齋に石州流の茶道を学び、のち一派を創して大口流と称した。また三条西家の香道を臼井氏に、禅学を雲門和尚に学んだ」『国書人名辞典』第一卷、岩波書店、一九九三年発行。号は、流芳の『香道秋の光』ほかに「大口含翠先生門人」と記すので含翠を用いた。
- (27) 岩瀬文庫蔵香合叢書所収。巻末に「元文丁巳菊月上浣 岩田信安記」とある。丁巳は元文二年(一七三七)。
- (28) 拙稿「香人・米川常白伝考」『川村学園女子大学研究紀要』第13巻第2号、二〇〇二年三月発行、一九頁、参照。
- (29) 岩瀬文庫蔵『香道百箇条 下』によれば、大口含翠門の相弟子に林専齋光洸がいる。この書を含む『香合叢書』三十九冊は林専齋に関わるものと推察されるが、岩田信安の名を記さず流芳の書を写したものが多く、同門の林専齋が流芳の書を伝授に使っていたということは、含翠門で御家流構築に同門の士も参加していたのではないか。
- (30) 鹿児島大学玉里文庫蔵『御家流香事稽古目録百箇条注解』。巻末の年記は享保十九(一七三四)年三月であるが流芳の願いのもと加筆が続けられたとあり、文中に延享元(一七四四)年の記述もある。
- (31) 国会図書館蔵『御家流香道百ヶ条口伝聞書日月星合巻』・東北

大学狩野文庫蔵『御家流香道百ヶ条口授伝』。岩瀬文庫蔵『香道百ヶ条』は記述が少ないが初期の聞書の一つと思われる。

(32) 神宮文庫蔵『香道廿七箇条注』

(33) 一色梨郷は大枝流芳の息子とする。注1の二八二頁。『偷閑記聞』は一色梨郷本と都中央図書館加賀文庫本がある。後書は書込が多く原本の形とおそらく異なるため、一色梨郷が孤芳山人を息子とした根拠の部分は、加賀文庫本ではわからなかった。加賀文庫本の沙原居士の跋に「江如練の息子の蘭台は、近頃私の所にこの書（稽古目録の聞書）を持って来て私に見せて『私は幼少の時から岩翁（大枝流芳）について焚香の技を学んだが、まだ業の修得を終えないうちに老人は逝去された。そこで同門の高弟を訪ね翁の遺事を聞いた云々。』とあり、蘭台の願いに応じて、彼が書き出してきた聞書を点検し訂正を加えたという。

(34) 東京国立博物館に「志野流米川家伝 香道三十二ヶ条」がある。

この書は米川常白↓玄察↓眉山↓松阿↓小倉祐乗と伝わった書という。この三十二ヶ条は『香道千代の秋』に載せる修正前の三十二ヶ条の末尾の五条と東博本の欠条二条を除き一致している。この書の伝来が正しいものとすれば、『香道千代の秋』に載せたものは、米川流について探っていたという含翠から聞いた内容を元として一部手直しして載せたのかもしれない。百箇条の香事伝来系譜の米川流は眉山が最後になっているものがあることからそのようにも推定できる。

(35) 二十部の書名と正編の注解が現存している。国会図書館蔵『香道伝』、『香道伝書』七十一である。

(36) 『伝統と現代』第十巻『茶と香』学芸書林、昭和四四年七月二五日発行。二〇九・二一一頁。

(37) 都中央図書館加賀文庫『香木達味考』識語による。宗栄は①の実隆命日の香会参加者の一人。岩田五良兵衛は江田世恭の書込。

(38) 津軽藩に招聘された野本（元）道元（一六五五〜一七一四）の子の惣吉らしい。道元は茶道の名人で儒学はもちろん養蚕・織物・紙漉などにまで達し津軽藩の殖産に大いに貢献したというから、子の博学多才も想像される。『津軽藩旧記伝類』国書刊行会、一九八二年一〇月発行、二〇六〜八頁参照。